

ステップスギャラリーオーナー、吉岡まさみが「好む」作品を展示するこの企画は、吉岡が時代をどのように読み取っているのが問われる、非常に厳しい展覧会である。単に気に入った作品を陳列などしたら、ステップスギャラリーのレベルが疑問視され、誰も見に来なくなる。確かにアーティストが時代を読み取るという言葉には賛同するが、その時代を読み取った作品をどのように選出し、世に問うにはギャラリーのキュレーションが不可欠である。

今回の展覧会は、このような時代の要望に応えた。参加したアーティスト達は全てステップスで展示している常連である。若手、ベテラン、立体、平面とそれぞれ異なった仕事をしていても、やはりアーティストは時代に敏感である。ここの展示された作品群は、立場は異なっても同じものを見ている。それは、近代美術消滅の危機である。「最初は宗教帝国だったものが、軍事帝国に引き継がれ、そして市場帝国となる（中略）。ついに帝国は、きわめて複雑



な一つの世界秩序を人類に授けたのだった」(J・アタリ | 山本規雄『新世界秩序』作品社 | 2017年 | 2018年 | 217頁)。この世界の流れから芸術も逃れることができない。宗教芸術は分る。国際展、巨大美術館、マーケットを見れば今日の芸術が市場的であることも理解できる。ならば近代美術とは、「軍事」だったのかと認識を新しくする。もっともな定義である。この点は更に深い考察が必要になるが、重要なのは、「軍事」から「市場」へ簡単に流れるのではなく、我々は近代美術を再検討し、更なる可能性を引き出されなければならないのではないだろうか。諦めてはいけない。その可能性に、私は子供が描くような、描くこと事態に熱中することを私は挙げる。「プロ」の美術の仕事と、ミュージアムピースに嵌る作品がイコールであってはならない。近代美術が求められたのは天才的な技巧と発想であった。今日の動向にヘタウマは確かに存在するが、それは単にアンチ天才主義に過ぎない天才主義の一つの類型に過ぎない。落書きであったり、塗り絵であったりする、もっと自由で、本質的な作品がこれから誕生すべきなのだ。ここに集まった作品群が、この傾向にあることを私は驚くと共に歓喜した。作品の制作の喜びは生き様に繋がる。そこに鑑賞者の違いは存在しない。

